

次の文章を読んで問に答えなさい

雑木山に生きること

秋、雑木山が色づいている。

雑木山というのは、人間と自然との交わる場所。鳥は山からやって来るし、人は里から入りこむ。花が咲き、チョウが舞い、秋には木の実が色づく。

そこでは、ウルシにかぶれたり、イバラにさされたりするかもしれない。道は曲がりくねり、マムシなどもいるかもしれない。道を曲がるたびに、新しいおどろきと、そして危険とがある。それでもそこで、人は自然との交遊を楽しむことができる。

しかしながら、だんだんと杉山がふえてきた。そこでは、人間の論理だけが貫徹している。

整然と植えられた杉たち、道は見通しがよい。何年かたつと、その杉はきりだし、人間に確実な利益をもたらすかもしれない。未来が計算され、現在が管理されている。

しかし、そのかわり、そこにはチョウも花もない。さまざまの木の彩りのかわりに、とがった杉の落ち葉だけがある。あまり遊びに行くところではない。

ぼくは、人間の住むのは、やはり雑木山がよい、と思っている。とくに学校というところは、雑木山のようにあってほしい、と考えている。

人間が、これだけ多くの顔を持ち、これだけ多くの心を持つからには、それが様々な彩りで交わりあってこそ、楽しいではないか。少々の危険があっても、管理された杉山であるよりは、雑木山の豊かさがほしい。未来への計画のために、人間の論理で管理しつくされたのでは、少しも楽しくない。

人間の社会というものは、みんなが同じ心で、同じ姿になってしまつては、空しいものだ。なにかの目的にとつては、足をひっぱるものがなくて、効率がよさそうに思えるが、そうした単純化された集団は、もろさを持っている。一見は、その集団の目的からはずれたような人間も含めて、いわば雑木山のような集団のほうが、その豊かさゆえに、結局は集団としても健全になる。

いまの学校は、だんだんと杉山に近づいている。そのことをぼくは憂慮しているが、

せめてきみたち自身が、だれもが杉の木になるのだけは避けてほしい。カシの木のよ
うな人間も、フジの木のような人間も、あってよいのだ。それらが交わりあって世界を
作ればよいのであって、山の持ち主（「国家」かしら？）のために木が生えているわけ
ではない。そして、本当は、そのほうが山は豊かになる。

自分と違った姿を持ち、自分と違った考えを持つ他人、それらが交わりあって豊か
な世界を作るところが、学校のはずである。なるべくなら、自分と同じようでない他
人が、いろいろとまざりあっているほうが、その世界は豊かになる。

未来の計画のほうばかり考えていると、こうした世界の豊かさが見えにくくなるも
のだが、結局は人間にとつて、豊かな世界のなかで豊かな人生を送ることが、幸福と
いうものだと思う。

とくに青春、チョウや花の季節ではないか。

（森 毅 『毎日中学生新聞』の文章による）

問

あなたの身近な集団を取り上げ（学校に限る必要はない）、その集団が「雑木山」に
近いのか、「杉山」に近いのか説明しなさい。またそのことについてあなたはどの思
っているのか、あわせて述べなさい。字数は500字以上600字までとする。

〈評価基準〉

1. 字数（500～600字）が足りていない。過不足。
2. 字数は足りているが、「雑木山」「杉山」の比喩が理解できていない。
3. 字数は足りており、かつ比喩は理解できていて、その理解を踏まえて集団につい
ての説明と自分の考えが展開されている。
4. 3を満たした上で、集団に対する自分の考えも的確に述べられている。的確にと
いうことは、例えば次のようなもの。
 - ・ 自分の考えの根拠も明確に述べられている。
 - ・ 集団について、「雑木山」の要素も「杉山」の要素の両方があることを踏まえ
て、分析的に述べられている。
 - ・ 集団の課題の解決の方向も示されている。
5. 4を満たした中で、文章表現も含めて特に優れている。